

2019年度の活動方針について

組織の拡大・強化

19年度の目標として5名の新たな会員を迎え、26名とすることを掲げる。次の総会には執行部の刷新ができるように2年間で体制を整えていく。

財務状況の改善

自主事業の収益性の確保のための、事業内容の見直し、改善を進める。

バランスの良い財源を確保するために、優良な受託事業の獲得を目指す。

広く寄付等の資金を集めるために資金獲得のための担当者と部会を設置する。

<寄付について>

ネットショップ「河北潟湖沼研究所のお米屋さん」に少額の寄付商品を設置する。

実際の寄付集めには使やすいパンフレットを作成する。寄付金がどの活動に使われるのか、研究所がどう地域に関わっているのか、といったところをわかりやすく伝えるものとする。

外部の寄付サイトへの掲載を目指す。

新規事業について（出版部門）

河北潟湖沼研究所として出版部門を持つ。書店コードは既に獲得しており、屋号は「市民科学出版」とした。年内に2冊程度の自費出版の受注を目指す。また、河北潟での独自の出版物を企画する。

流域エコツーリズムの展開

地球環境基金助成の最後の1年となるので、次につながる流域エコツーリズムの取り組みを進める。

流域連携を目指し、「河北潟・大野川流域生物多様性協議会（仮）の設立のための呼びかけ」を関係団体に個別にアプローチし、具体的な展開を目指す。

新しいビジョンとミッションに基づいた活動

新しいビジョンに基づき作成されたミッションのタイムスケジュールに則り、それぞれのプロジェクトを進めていく。この中で、研究事業の活性化を図る。2019年度においては、第一に資金の獲得を目指す。また、高木基金により汽水化の課題を整理する。

農業分野での社会事業

地域産業との関わりでは、引き続き農業分野での産業との関わりを追求していく。生産

に引き続き販売の展開が重要となるが、「生きもの元気米」「すずめ野菜」の拡大を追求し、河北潟ブランドとしての展開を展望する。

販売のためのしくみとして駅西マルシェを続ける。

<生きもの元気米>

2019年産契約状況（見込み含む）は2018年とほぼ同じ状況であるが、全量買い取りしていた2枚の圃場で生産者より数を減らしてほしいとの要望があり、量が若干少なくなる予定となっている。

活動を長期的に継続発展させるために以下の課題がある。

- 1) 生きもの元気米圃場を増やすための保管場所および人員の確保
- 2) 発送作業の労力削減
- 3) 生きもの元気米を直接農家が販売する仕組み
- 4) 調査した標本の同定と分析
- 5) 目的・問題提起と調査結果の見える化

表. 2019年の生きもの元気米の契約予定

水田枚数	9枚（うち1枚は蓮田）
水田面積	26,748 m ²
契約量	6,240kg
農家数	7軒（うち1件は研究所）
仕入金額	1,700,000円

アクト・ビヨンド・トラストのネオニコチノイド系農薬問題の公募助成を受託でき、1,000,000円の予算が付いた。これにより、課題4と5に取り組むことができる。具体的には、今年度活動計画として、1) 河北潟周辺で殺虫剤の空中散布マップを作成する、2) 市民参加の公開生物調査の実施、3) 研究成果報告会の開催、4) 結果をまとめた冊子の作成、5) ビデオやウェブでわかりやすい情報発信、6) 予防的防除についての意識調査を実施する。

<すずめ野菜>

売上としてはマルシェおよびA-COOPでの販売で50万円を目標とする。Webを通じてすずめ野菜の目的と展望していることを企業や個人にアピールし、協力者が得られるようにする。金沢駅西ゆうぐれ金曜マルシェの開催時間中に、野菜や生きもののお話しなどが見えるよう工夫する。ピクルスの製造に着手し、多品種少量生産の彩り豊かなすずめ野菜らしい商品をつくる。

<生きもの元気レンコン>

生産農家である農事組合法人Oneの事情により、生食用のレンコンは河北潟干拓地で作られ、潟周辺圃場でとれたレンコンは加工用に使う計画となったことから、2019年より干拓地の圃場に変更することとなった。とくに農薬や肥料の違いはなく、同じ品種のレンコンが作られている。

1月～3月にレンコンと合わせた生きもの元気米のセット販売などをつくる。

<ゆうぐれ金曜マルシェ>

これまでの参加農家は10軒(楽園果実石橋農園、藤木農園、すみれ農園、農事組合法人One、ハーブ農園ペザン、能登島、あながとう農園、菜友館、てんばちゃん加工部会、ウッドスタイルカフェ)であるが、現在継続的に参加しているのは1～2軒のみとなっている。2出店者の募集に力を入れていないことから、募集していないと思われる可能性もあり、フェイスブック等で呼び掛けるよう心掛ける。

夏～秋はその場ですぐに食べられるネギ焼き、レンコン焼き、蒸し芋などを準備する。

協働の推進による新しい地域づくり

河北潟自然再生協議会の強化を基本として、地域団体の参加と法定協議会の可能性を追求していく。

「生きもの元気米」事業を柱とする農家との協働を引き続き実施し、市民参加型の農業と周辺水辺管理のモデルを構築する。

地域のNPOとの連携

NPOだけでなく、干拓地などで活動する小規模の事業者との連携も模索する。

河北潟流域の活動者との連携を重視する。牧山町の団体との交流を進める。

中央のNPOとの連携

2018年5月18-20日に日韓NGO湿地フォーラムを金沢市でおこなう(実施済)。

世界湖沼会議10月16日-18日に、八郎潟、湖山池、中海等の研究者と連携した自由集會を開く。